

SEIG

聖学院大学

後援会会報



All Seigakuin Fellowship

第67号

2026年4月1日

発行所：聖学院大学後援会 発行人：古屋博規 〒362-8585上尾市戸崎1-1 TEL048-781-0925 FAX048-726-2962 E-mail：parents@seigakuin-univ.ac.jp

「神の導く平和」

聖学院大学後援会 会長 古屋博規



2025年度に聖学院大学を御卒業された皆さん、2026年度に聖学院大学に御入学された皆さん おめでとうございます。

この会報の発行と時を同じくして、イランとアメリカ・イスラエルの紛争がはじまりました。石油タンカー航行が止められ、原油の値上がりがあり、ガソリン価格の上昇など、起因する出来事を憂慮します。どうか一日も早い解決がなされますようにと祈るばかりです。

2026年度は、聖学院大学欧米文化学科が、国際文化学科に変更されました。

この事に関連して、私は、根岸先生の本を思い出しました。

専修大学の根岸哲郎先生は、「異文化へのまなざし」の本の中で、「世界はさまざまなことばに充ちてい

る」と題して、バベルの塔から降り

て世界を広げようと呼びかけています。ビートル・ブリューゲルが1563年頃描いた「バベルの塔」を紹介して、聖書を引用します。「彼らは、さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。全地に散らされるこ

とのないようにしようと考え建設を始めたので、それを見た神は『彼ら是一群の民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことを始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。』としたために、人々は各地に散っていった……』と創世記11章に書かれています。

「バベル」の語源は「乱れ」です。人間が、天（神）に届く様な塔を建てようとすると傲慢さは、人間の謙虚さを失い、コミュニティ、ケーシヨンの乱れが生じます。

ブリューゲルの1563年頃に描

いた「バベルの塔」の背後には、現代の多様化した文化の基盤を支えるコミュニケーションツール（AIなど）が混乱し、独りよがりな思いが、崩壊を引き起こすことを聖書は警告します。

2025年度に御卒業された学生の皆さんも、2026年度に御入学された学生の皆さんも、礼拝に出席して聖書にふれています。礼拝のはじまりを呼びかける鐘の音を聴いて、ノアの箱船をモチーフとした礼拝堂に入場します。そして聖書にふれて、それぞれの課題に向き合います。

聖学院大学の皆さんには、神を仰ぎ、人に仕う、聖学院大学の建学の精神を大いに学び合い実践して頂きたく思います。

聖学院大学後援会は、神の声に従い、入学から卒業に至るまで、皆様に思いを込めて協力し励んでまいります。

この一年間も、聖学院大学の発展と勉学に力を注いでまいりましょう。保護者の皆様には是非共、聖学院大学後援会の役員に御参加、ご協力をして頂けると大変大きな力になることと心からご期待致しております。是非お声掛け下さいますよう宜しくお願い致します。

学長挨拶

「新たな学びのはじまりに寄せて」

聖学院大学学長 小池 茂子



この度はご子女のご入学、誠にありがとうございます。新入生のご父母をはじめ、ご関係のみなさまに心よりお祝いを申し上げます。

聖学院大学は、明治期に来日したプロテスタント・キリスト教の宣教師によって創立された学校を源流とし、120年以上の歴史をもつ学校法人聖学院の学園の一翼を担っています。本学はキリスト教の精神に基づき教育を行い、学生一人ひとりが神から与えられたよき賜物を生かしつつ、隣人と社会に仕える人となることを教育目的として掲げ、その精神を今日まで大切に育んでまいりました。

新約聖書ヨハネによる福音書の第15章16―17節には「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたがあな

出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、(中略)わたしがあなた方を任命したのである。互いに愛し合いなさい。これが私の命令である。」と記されています。聖学院

大学に集められた学生たちもまた、それぞれ異なる背景と経験を持ちながらこの学び舎に導かれてきました。私も聖学院大学に連なる教職員、学生一同は、この学びの共同体に新たに加わってくださった新入生のご入学を心から祝し、その多様性を尊重し共に歩む仲間として歓迎いたします。

現代はしばしば「先の見えない時代」と表現されます。こうした社会を生きていくために必要な学びとはいかなるものなのでしょうか。ユネスコが示した「21世紀の学びの4本柱」は、その問いに示唆を与えてくれます。それは、1. 知ることを学ぶ (learning to know) 2. 「為すことを学ぶ (learning to do)」 3. 「共に生きる (こと) を学ぶ (learning to live together)」 4. 「人間とし

て生きる (こと) を学ぶ (learning to be)」というものです。これらは、知識の学修にとどまらず、行動すること、他者との協働、隣人や社会への貢献、自己理解を重視する本学の教育理念と深く響き合うものです。

昨年度、本学では全学共通教育群を刷新しました(通称「聖学院エッセンシャルズ」です)。この「聖学院エッセンシャルズ」は、キリスト教理解や世界観の形成、コミュニケーション力の育成、社会課題への気づきと実践、人間理解や教養を深める学びなどを柱として構成され学生の成長を総合的に支援しています。

また、新たにされた全学共通科目では、現代社会を生き抜くために必要なAI・データサイエンスに関する充実した科目群も用意されています。そして、これらの学びは各学科の専門科目と有機的に結びつき、1年次から4年次まで一貫して確かな思考力と表現力を養う構成となっています。

さらに、本学は「一人を愛し、一人を育む」というタグラインを教育の中心に据え、少人数教育を実践しています。多くの授業は50名以下、ゼミは10名前後で運営され、教員が学生の個性や状況に目を配りながら丁寧に学びを支えています。大学生

活に不安を抱えて入学される学生もおられますが、アドバイザーやゼミ担当の教員をはじめとする、教職員が学生たちとの対話を重ねながらその成長に寄り添い続けます。

大学時代は、多くの出会いと経験に満ちた貴重な時期です。授業やゼミに加え、学友会活動、ボランティア、スタディーツアー、インターンシップ、留学など、多様な経験が学生の視野を広げ人生を形づくる大切な土台となります。本学は、学生が自らの道を主体的に選び取っていくよう、キャリア支援も4年間を通じて継続的に行っています。

私は「一人は学問的研鑽と共に、周囲から注がれる愛によって成長する」と信じています。新入生の中には、大学生活に馴染めるか不安を抱えておいでの方もいらっしゃるでしょう。新たな教育の場で誰かによって覚えられ、支えられ、時に厳しく指導されることを通じて、一人ひとりの可能性は格段に伸びていきます。

これからの4年間、ご子女が学問への探究心を深め、よき友や教員と出遭い、温かい交わりの中で成長していけることを心より願っております。そして、皆さまには今後とも、どうか温かいご支援と励ましを賜りますようお願い申し上げます。

新入生・新入生ご父母の皆様へ

ご入学おめでとうございます

学部長からのメッセージ



政治経済学部長

八木 規子

聖学院大学経済学部へようこそ！
ご入学された新入生、また新しく後援会にご加入くださった皆さま、誠にありがとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

いま世界では、アメリカ、イスラエルによるイラン侵攻など私たちの考えを揺さぶる事案が多発しています。こういうときこそ、政治経済学部の学びが力を発揮します。政治学が、国際政治の観点から事案の背景や現況を読み解く力を与えてくれるのはもとより、法学は、国際法から見た視点を、経済学は、原油価格高騰の仕組みやその余波を、経営学は、各国指導者のリーダーシップのありようが今後の行方を左右するかどうか、そして社会学は、こうした事案がそれぞれの社会で生きる人びとの暮らしにどのような影響を与えているか、等々、政治経済学部で学べる

社会科学の諸分野それぞれの切り口から、複雑な事案を理解する手がかりを与えてくれます。

こうした政治経済学部の学びを支えるのは、教室での学びだけではありません。政治経済学部では、大学を飛び出して、現地を訪ね、現場・現物から学ぶフィールドスタディと呼ぶプログラムを強化しています。昨年度は、韓国ソウル（9月実施）と沖縄（2月実施）をフィールドとしたプログラムをはじめとして、地元企業・自治体でのインターンシップ、URの団地再生事例調査、埼玉中小企業家同友会の経営者による講義、さいたま市への政策提案など、盛りだくさんのフィールドスタディ・プログラムを実施しました。フィールドへ出向くことで、教室で学んだ理論的な知識を、現場での解決策に落とし込む力を身につけます。

教室での学びとフィールド（現場）からの学びを組み合わせ、複雑な現実を多角的に捉える力を育む、政治経済学部の学びにご期待ください。後援会の皆さまから「うちの会社も訪問してほしい」「こんな取り組みをしている地域がある」といったご提案をいただくことも歓迎いたします。

これからの4年間、皆さんの学びがより幅広く、より深く進化してくよう、私たち教員は全力でサポートしてまいります。ともにこの4年間を楽しみ仲間として、私たちが歩んでいきましょう！



人文学部長

濱田 寛

保護者の皆様、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

人文学部長、日本文化学科所属の濱田寛と申します。日頃のご支援に感謝申し上げます。

学生募集を巡っては、2025年度も引き続き厳しい環境となりましたが、新入生を得て、新しい年度を迎えようとしております。かつては「少人数教育」はある種のパワーワードでありましたが、現在の大学教育の現場は「少人数教育」というのは特別な何かではなく、その「少人数教育」を前提としたその彼岸で各大学・学科の教育のありようが問われる状況にあります。聖学院大学が、そして人文学部がどのような提案ができるのか、私たちの新しい取

り組みが厳しく問われております。そのような状況において、人文学部では、欧米文化学科の学科の名称変更を申請し、2026年度からの新入生を「国際文化学科」の新入生として新しく迎入れることとなりました。「欧米文化学科」として築き上げてきた学科の伝統は大切に継承しつつ、新たな時代のニーズに応える、新しい歴史が始まります。このような試みは、名称を変更するだけで達成できるものではありません。

時代の要請に柔軟に対応するしなやかさと、どのような場面においても変わらない・変えてはならない普遍的な価値を着実に伝えていく、人文学の学問の在り方に愚直に、そして誠実に取り組んで参ります。

人文学部は国際文化学科・日本文化学科・子ども教育学科の3学科から構成される、本学最大の学部ということとなります。また、本学部にはさらに大学院「文化総合学研究所」が設置されており、博士前期課程（修士課程）・博士後期課程がございます。漸く内部進学による大学院への進学の環境が整い、進学実績としての結実しております。本学部での学びの更なる展開にも大いに期待をしております。

学科ごとにそれぞれの固有の学問的課題・社会的要請に真摯に向き合いつつ、学修者本意の教育への不断の努力をお約束申し上げます。保護者の皆様にはどうぞ人文学部の新たな挑戦にご期待下さい。そして引き続き、ご支援のほど切にお願い申し上げます次第です。

心理福祉学部の「学びの魅力と強み」



心理福祉学部長
中谷 茂一

日差しが暖かく感じられる季節になり、新年度を迎えまして、多くの新入生の皆様と進級した在学生の明るい声がキャンパスに響いております。ご入学されましたご家族の皆様におかれましては心よりお慶び申し上げます。また在学生全員の保証人様をはじめとした後援会の皆様からの多大なご支援で本学が支えられていることに深く感謝申し上げます。今春から心理福祉学部長を拝命しましたご挨拶を兼ねて、この場を借りて本学部のご紹介をさせていただきます。心理福祉学部の「学びの魅力」や「強み」は様々ございますが、下

記3点が代表的なものとなります。

1 心理学と福祉学の両方を有機的に学べます。

「心理学科」や「社会福祉学科」は他大学にも多数ありますが、本学部の特徴は、人の心の問題と現代社会における福祉的課題について、「心理学と福祉学の両面から学ぶ」ことができる点が高く評価されて選ばれています。医療・福祉機関・地域支援など幅広い場面で心理と福祉の知識と技術を応用し、卒業後の多様な活躍にもつながるカリキュラムとなっております。

2 資格取得を希望する学生に複数のカリキュラムと手厚い支援体制があります。

社会福祉士、精神保健福祉士、公認心理師（大学院進学を含む）など、心理・福祉領域の国家資格を取得できるカリキュラムが整備され、少数での丁寧な指導を展開しております。また、埼玉県内では唯一の「スクールソーシャルワーク教育課程」を設置し、学生の興味関心の高い、学校現場における専門的な支援者を養成するカリキュラムにも対応しています。

3 資格を目指さない学生も心理学と福祉学を学ぶことで社会の様々

な場所で貢献できる素養が育まれます。

福祉施設、医療機関など資格と直結する現場だけでなく、NPO、行政、一般企業等さまざまな分野で対人サービスや多様な消費者のニーズに応える商品開発など、共生社会を実現する職業人としての素養につながるカリキュラムで教育を展開しております。

その結果、卒業生達のお客様など相手の立場に立って物事を考える力、組織内のいろいろな考え方を受け止める力、社会の役に立ちたいというマインドが就職活動や就職後に高く評価されています。

また、心理福祉学部の「安心できる雰囲気」を評価する声がよく聞かれており、オープンキャンパスに来場した受験生から「学科の先輩方の対応が丁寧で優しい」という声が多いことに象徴されているように、おだやかな学生が多く、安心して勉強できる雰囲気があります。

以上のように、入学した学生がすでに持っている人間力をさらに高めたいことに学部教職員一同、取り組んで参りたいと存じます。ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

地域連携を通じた専門人育成に向けた大学広報の取り組み

入試・広報課

マネージャー 山田 真

聖学院大学は、「地域に根付いた専門人の育成」を教育理念として大学運営を行っています。学生募集においても、単なる広告や露出を目的とした広報ではなく、本学の研究・教育活動が社会の中でどのように受け止められ、どのような価値を生み出しているのかを丁寧に伝えることを大切にしています。

本学の教育活動が地域と結びつくことで、学生たちは学内にとどまらない多様な人々と交流し、実社会の中で学びながら視野や価値観を広げていきます。その代表的な取り組みが、吉川臨太郎先生が担当する「インターンシップPBL型」の授業です。本授業では、企業や団体から実際の課題を提供いただき、学生が所属学科を越えたチームを編成し、議論と検討を重ねながら課題解決に取り組みます。

2025年度は、地元プロスポーツチームであるRB大宮アルディージャ（サッカーチーム）および埼玉上尾メディックス（女子バレーボー

ルチーム)から課題をいただきまし
た。両チームとはパートナースポ
ンサー契約を結び、学生の活動の場を
ご提供いただいています。授業では、
運営会社の広報担当者やゼネラルマ
ネージャーによる講演に加え、スポ
ーツ運営の裏側の視察、試合当日の
イベント企画を実施しました。また、
学生たちは西武・そごう大宮店の店
内放送や、上尾駅コンコースで選手
と共にを行った街頭広報など、吉川先
生の指導のもと、地域の皆様のご協
力を得ながら、課題解決力や社会人
基礎力を実践的に養う機会を得まし
た。自分たちで企画したイベントを
どのように集客し、その成果をどの
ように測るのかといった経験は、座
学だけでは得られるものではありません。
また、これらの取り組みは、埼玉
のラジオ局であるFM NACK5
や読売新聞社といったメディアにも
取り上げられ、学生が取材を受ける
など、大変貴重な経験につながりま
した。地域社会の資源と連携しなが
ら学生を育て、その成果を社会に発
信することで、「地域に根付いた専
門人の育成」という本学の理念を可
視化していきます。入試・広報課と
して、今後も教育活動とその成果に

結び付くような広報支援を進めてま
いります。

校内アルバイトや大学が関わるボラ ンティア活動の情報と今後について

大学事務局経営企画部 大学総務課

マネージャー ペニンントン 太郎

学生の成長を支える「学内アルバイ
ト」と「ボランティア活動」

— 聖学院大学の学びの現場から —

聖学院大学では、学生の成長を支
える大切な学びの場として、校内ア
ルバイトやボランティア活動を積極
的に推進しています。これらの活動
は、単なる収入を得る手段ではなく、
社会性や責任感を育み、「人の役に
立つ喜び」を体感できる貴重な教育
機会と位置づけられています。

キャンパスを支える学生たち「スチ
ューデントアシスタント(SA)

本学では、学生アルバイトを「ス
チューデントアシスタント(SA)」
と呼び、単なるアルバイトではなく
「大学をともに支える担い手」とし
て大切にしています。SAとして働
く学生たちは、教職員と協力しなが
らキャンパス運営に関わり、自分た
ちの学びの場を自ら支える経験を積
んでいます。

代表的な活動の1つとして、オー
ブンキャンパススタッフがいます。
彼らは来場者の案内、受付、イベン
ト運営補助、キャンパスツアーなど
を担当します。初めて大学を訪れる
高校生や保護者の方にとって、学生

スタッフは「聖学院大学の顔」とも
言える存在です。先輩として温かく
声をかけ、緊張をほぐしながらキャン
パスの魅力を伝える姿は、多くの
来場者から好評をいただいています。

他にも、教員の補助や授業準備の
サポートをする8号館SAや、図書
館のカウンター対応や書架整理、本
の装備作業などを行うライブラリー
アシスタント(LA)などもありま
す。

このように、聖学院大学ではキャン
パスのさまざまな場所でSAが活
躍しています。こうしたSA活動を
通じて、学生たちは時間管理能力、協
調性、主体性、そして「誰かの役に
立つ喜び」を学んでいます。

建学の精神を体現するボランティア
活動

2011年より継続して実施して
いる東北ボランティアスタディツア
ーをはじめ、学生コーディネーター
として活動する学生サポーターメンバ
ー(以下、サポメン)の育成、大学

のボランティア活動を活性化させる
ことを目的としたサポメンとの協働
企画、さらにはコープみらいと連携
し学内で気軽に取り組める切手整理
ボランティアなど、多様な取り組み
が行われています。学生は机上の学
びだけでなく、実社会に触れる経験
を通して、共生社会の担い手として
成長していきます。

今後は、SA活動とボランティア
活動をさらに充実させ、活動情報の
共有、事前研修、振り返りの機会を
整えることで、学生の学びをより深
めていきたいと考えています。また、
後援会の皆さまにも学生の活躍をお
伝えできる機会を増やせればと考
えております。

聖学院大学は、学生一人ひとりが
安心して挑戦し、人とつながり、社
会に貢献できる大学であり続けます。
校内アルバイトやボランティア活動
は、その実現に向けた大切な一歩で
あり、これからも大切に育てていき
たい取り組みです。



聖学院大学のパイプオルガン―祈りと音楽が響くチャペルから
 大学事務局経営企画部キリスト教センター事務局 マネージャー 松田 慶光

聖学院大学のチャペルには、フランスの名門ガルニエ社製のパイプオルガンが設置されています。283本のパイプと40のストップを備え、3段鍵盤でバロックからロマン派まで幅広い楽曲に対応できるこのオルガンは、2023年10月、学校法人聖学院創立120周年の記念礼拝を経て奉獻されました。筐体にはナラ材が用いられ、金沢の金箔を施した唐草模様が荘厳な美を添えています。

2025年11月1日(土)には、秋のヴェリタス祭の特別企画として富田一樹氏によるパイプオルガンコンサートが開催されました。富田氏はバツハ国際コンクールオルガン部門で日本人初の第1位と聴衆賞を受賞された世界的オルガニストです。事前申込枠500名が定員に達し、学内外から多くの来場者が集まりました。J.S.バツハの「小フーガト短調 BWV578」やサン＝サーンスの「アヴェ・マリア」など全10曲が演奏され、参加者からは「心が洗われる時間だった」「オルガンの魅力を再発見した」との声が寄せられました。

また、2025年度には学生向け

の「パイプオルガン体験会」が計8回開催され、24名の学生が参加しました。手鍵盤や足鍵盤、ストップの操作を実際に体験し、事後アンケートには回答者全員が「とても満足している」と答えるなど大好評でした。

今後のイベントとしては、2026年5月24日(日)に聖学院教会(聖学院大学チャペル)にて「山田康弘オルガン・リサイタル」が予定されています。開場14時、開演14時30分で、入場無料・予約不要です(任意額のご寄付をお願いしております)。

J.S.バツハ「神の時こそいと良き時」BWV106やJ.バツヘルベルのカノン、C.フランクのコーラル第3番、L.ボエルマンのゴシック組曲Op.25など、バロックからロマン派まで多彩なプログラムが組まれており、ガルニエ社製オルガンの魅力を存分に味わえる絶好の機会です。

さらに、2026年度も秋のヴェリタス祭期間中にパイプオルガンコンサートの開催を企画しております。ぜひお楽しみにお待ちください。

祈りと音楽が一つになるチャペルの響きを、多くの方に体験していただければ幸いです。

国際交流センターにおける海外留学の現状と今後の展望
 大学事務局学務部教育支援課
 ングワ―路津子

国際的な人的往来が回復する中、本学の海外留学制度も新たな局面を迎えております。交換留学、認定留学、短期語学研修をはじめ多様な制度を整え、学生が異文化で学ぶ機会を提供してまいりました。

交換留学では、コロナ禍以降も韓国・湖西^{ほそ}大学校との相互派遣・受入れで安定した交流が続いております。一方、米国提携校については、派遣先の授業料無償の利点があるものの、英語力基準の高さ、円安・学費高騰の影響により派遣できておりません。英語要件が比較的緩やかな欧米文化学科のハイラインカレッジ認定留学でも同様の傾向がみられます。今後は教育課程等の変化も踏まえ、提携内容の精査を進めてまいります。

短期語学研修は、各地域の研修費が2〜4割上昇、一部のグループ型研修が最少催行人数に満たず実施できまらなかったが、過去3年間で計11名を派遣し、異文化理解や国際的視野の拡大といった成果を得ています。こうした状況を踏まえ、1名か

ら参加可能なプログラムへ移行し、より参加しやすい体制の整備を進めております。

1年生を対象とした意識調査では、約3割が留学に関心を示したものの、7割超が「経済的理由から困難」と回答しました。本学では海外研修費の1〜2割を補助金・奨学金として支援しており、今後も可能な限り継続してまいります。同時に、関心層へ実行可能な選択肢を示すべく、プログラムの選定に加え、欧米文化学科におけるJSAFとの連携や、他大学との共同開催の準備を進めており、2026年度より本格運用を開始する予定です。

学科主催海外研修では、政治経済子ども教育、心理福祉学科が専門分野に基づく短期研修を行い、過去3年間で計42名を派遣しました。学科主催海外研修は、専門性を深め、キャリア形成に直結する実践的な学びとなっております。

台湾長榮大学応用日本語学科と本学日本文化学科とのダブルディグリープログラム(2つの学位を取得する制度)では、2024年度に本学初の2名の修了者を輩出しました。今後は本学からの派遣実現に向け、語学教育体制や広報の強化が課題と

なっております。

また、提携校からの留学生を支援する、学生チューターも重要な役割を担い、活動を通じて多様性理解を深め、国際交流人材としての素地を培っております。

本学では、「一定人数を前提とする集団型モデル」から「少人数でも確実に支援するモデル」へ移行し、学生の異文化経験を自らの成長につなげられるよう支えてまいります。

2025年度 卒業生の進路状況及び 就職、進路支援について

大学事務局学務部キャリア支援課

マネージャー 磯田 和久

2025年度のキャリア支援は、「一人ひとりの自己理解を促進させ、希望進路を見出し導くこと。そのために一人を愛し、一人を育む。という聖学院大学の理念を職員ひとり一人が実現する」ことを使命として学生の現在地を確認し一人ひとりの状況に応じた支援に取り組みました。

2025年度（2026年2月末日時点）の就職希望者に対する就職率75.7%（留学生含む）となっております。近年の傾向として企業・団体がインターンシップ（就業体

験）に積極的に取り組み就職活動が早期化傾向にあります。また、文部科学省・厚生労働省・経済産業省の合意により2023年度からインターンシップ等の学生のキャリア支援に関わる取り組みが4つに類型化されました。期間5日間以上の条件を満たすとインターンシップでの評価を本選考で活用できるため夏から秋にかけて実施するインターンシップが採用の中に位置づけられています。

一方で就職活動やインターンシップに不安を抱いている学生に対応するために3年生以降様々な就職支援プログラムを提供し対応しています。

企業・団体との連携強化について埼玉中小企業家同友会と産学連携協定を締結し、地元企業との接点を増やすために学内での企業説明会参加や寄付講座を通じて地元企業の魅力を知る機会を創るなど様々な観点から取り組みを行っています。2025年度新しい取り組みとして8月～9月にかけて地元企業の魅力を知るために企業体験ツアーを企画し3日間計9社の企業を訪問しました。参加学生からは、訪問したことにより企業の取り組みなど詳しく知ることができた等の感想がありました。また、

11月ヴェリタス祭開催と併せて「地元企業つてすごい！展」を開催し、7社の企業がブースを設置し企業の魅力などを直接伝える場を設けました。学生だけではなく、近隣住民の方も立ち寄られました。

また、本学卒業生の採用実績・インターンシップ実習先となっている企業・団体等の採用担当者との交流を深める就職懇談会を11月に実施しました。企業団体等の採用担当者からは求める人材像や大学へ期待することを、教員からは教育方針や学生の特徴等について採用担当者に伝える学科別ミーティングを行い相互理解に取り組みました。また懇談会では古屋会長のご挨拶に続き求人やインターンシップ等昨今の就職活動に直結する情報交換を行いました。

2026年度は引き続き対面でのキャリア支援を通じて私たち職員も学生と更に向き合い、学生が何をも不安に感じどのような解決をしたいのかを一緒に考えながら、就職活動に向けて引き続き支援して参ります。



ヴェリタス祭に参加して

122J 齋藤 仁一

2025年11月1日（土）聖学院大学ヴェリタス祭に参加しました。キャンパスに一歩足を踏み入れると、学生たちの活気あふれる声と、この日のために準備を重ねてきた熱量が伝わってきました。

模擬店での一生懸命な呼び込みや、日頃の成果を誇らしげに語る展示、ステージイベント。家で見せる顔とはまた違う、一人の「大学生」として自立し、仲間と協力し合う我が子や学生たちの姿に、胸が熱くなる思いでした。

私は聖学院大学後援会委員として今年もバザーに参加、学生時代を思い出し、とても懐かしい気持ちになりました。

自由な発想で生き活きと活動する学生たちを目の当たりにし、このキャンパスで充実した時間を過ごしていることを再確認できた1日となりました。素晴らしい時間を共有させてくれた聖学院大学、学生のみなさまに心から感謝いたします。



聖書を学ぶ会に参加して

1255 桑折 由希

私は聖書を学ぶ会への参加は、初めてでした。というよりも後援会・親の会の催し物への参加自体が初めてでした。

初めての場所、初めてのお会いする後援会の方々、なかなかの緊張感です。

会の始まりはミニバザーの準備からでした。準備をしながら後援会の方々が優しく話仕掛けて下さり、私の緊張はほぐれていきました。私は聖書の準備もなく所謂手ぶらで参加したのですが、学ぶに当たって必要なことはプリントされた紙を頂いたので、安心できました。

今回の学びで印象的だったのは、イエス様の両親であるマリアとヨセフがベツレヘムへ行く途中でイエス様がお生まれになったこと。

時の権力者のヘロデ王が、ユダヤ人の王としてイエス様がお生まれになったのを知り、王が二人になるのを阻止するだろう、ということでした。

聖書の教えの中のほんの一説ですが、私が聖書に興味を持つには充分でした。

ヘロデ王が何をしたのか、イエス様その時どうなったのか。気になつて仕方がなく、帰宅後息子の聖書を借りて続きを探しました。

答えは新約聖書のマタイによる福音書と、ルカによる福音書にありました。

皆様もぜひ聖書を開いて、読んでみて下さい。

子供が大学を卒業するにあたり

1222P 山口 奈保子

この春、保護者として、子供が大学を卒業し、新たな一歩を踏み出す節目を迎えたことに、深い感慨を覚えております。入学当初は、高校とは大きく異なる授業の進め方に戸惑うことも多かったようですが、自ら考え、学びを深める姿勢を少しずつ身につけていきました。

また、在学中に経験したアルバイトでは、さまざまな立場の方々と接する中で、社会における基本的な礼儀や責任、相手を思いやる姿勢を学ぶことができたのではないかと思います。これらの経験は、教室の中だけでは得られない、貴重な学びであったと感じています。

さらに、就職活動を通じて、自分

自身と向き合い、将来について真剣に考える機会を得たことは、社会人として成長するための大きな一歩となりました。これから先、困難に直面することもあるでしょうが、大学生活で培った経験や人とのつながりを糧に、自分らしく歩んでいってほしいと願っています。

最後に、これまで子供たちを温かくご指導くださった大学関係者の皆さま、そして共に学んだ仲間の皆さまに、保護者として心より感謝申し上げます。



2026年度 主な年間行事(案)

※主な大学行事も含む

- 2026年
- 4月1日(水) 入学式、後援会会報第67号発行
- 5月13日(水) 春のキリスト教週間・キリスト教音楽会
- 5月16日(土) 後援会総会、役員会、保護者のための就職ガイダンス
- 9月23日(水) 春学期卒業式・秋学期入学式
- 10月10日(土) ヴェリタス祭バザー値付け
- 10月14日(水) 秋のキリスト教週間・創立記念講演会
- 10月31日(土) ヴェリタス祭・後援会バザー、親子で考える就職ガイダンス
- 11月2日(月) 就職懇談会
- 11月25日(水) 聖書を学ぶ会・懇親会・クリスマスツリー点火祭
- 12月16日(水) クリスマス礼拝
- 2027年
- 3月20日(土) 卒業式、役員会

編集後記

忙しい日々が続きますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。私は、気持ちが悪くなり、嫌な気持ちになった時、寺社・仏閣を巡ったり自然巡りをしています。ですが、この度、新しく「占い」の勉強を始めました。元々興味はあったのですが、知人から勧められ、一念発起。どこまでモノにできるかわかりませんが、スーパー占い師を夢見て楽しもうと思っています。

H.T

※後援会役員につきましては、全学年、随時募集しております。